

こころの光

實相の卷

二

御遺分

| | |
|--------|---|
| 法身本質 | 一 |
| 藏性 | 六 |
| 彌陀淨土判釋 | 七 |
| 大乘諸法相論 | 九 |

御逸事

| | |
|-----------|----|
| こぼるゝ光(其二) | 一 |
| 上人と小犬 | 三二 |

法身本質

法身は本體にして其本質は絶対精神態にして一切の萬法の根底なり、萬物は此體を所依とし之によりて生じ之に保存せらる。此法身に種々の名あり如來藏、妙真如性、また法身如來藏等。此絶対精神を名くるに外ならず。其本質は精神態なり。處現の上には物心二質なりと雖其元唯心の一元なり。楞嚴經に如來常に説玉ふ諸法の所生は唯心の所現なり。一切因果世界微塵は心に因て體を成す。故に知る宇宙現象界は物質界の如くなれども其本質は大精神態にして物心二界は所現の法なり。

絶対精神の一切萬法の自中存在の積極の理によつて如來藏と名づく此精神體が消極と積極、空と不空の二義あり。非時間、非空間、非物質、非活動なるは空如來藏。遍時間、遍空間、遍物質、遍活動にして而も精神態なるは不空如來藏即積極なり。如來藏とは衆生本具の理體にして之を統一して法身と云ふ。妙有如實不空眞と眞空、非物

質、非時空、非活動如とは妙有と眞空との如如の義也。

體の義

本體は是主質なり。三義あり禮と底と達、此主質に三義を具す。禮とは君尊臣卑、父貴子賤の本體の理萬法を統攝し終局の歸趣する處。

底とは萬法の根底なり。經に諸法の所生は唯心所現一切因果世界微塵は心に因て體と爲。又云、我、妙明不滅不生を以て如來藏に含(惟)妙覺明法界を圓()す此體を知るものは一切法の源底を知る。

如來藏空即消極の方面にして、非時間非空間非物心非六大非十界三千。不空、積極、遍時空、遍活動、徧六大十界等。

法身

萬法の一大原則にして徧空時間、一切活動の原理にして、又六大十界の心身土も、此大元理の元則なり。故に法身と名づく。楞嚴に陰入界に於て標して云ふ、殊に生滅去來本如來藏にして、常住妙明不動周圓妙真如の性なりと知ること能はずと。五陰本如來藏にして、妙真如性、乃至十界又爾り。七大も又元如來藏にして本無生滅、人々個々悉く如來藏性の一大元理個體現象なり。此身體も精神感情も智力も意志も五感覺も悉く法身の一大元理の個體現象にして、此大原則を體とせざるものあることなし。

楞嚴經に、七大の中一々皆云、汝元如來藏の中、性色眞空、性空眞色、なるを知らず、又三大の文中に性眞圓融皆如來藏本無生滅。

法身本體の屬性

法身は本體にして、般若と解脱とは屬性なり。般若は象大。解脱は力用大にして、本體と同じく法界に周徧せる精神態なり。法身は絶対精神態にして、般若は象大、即ち絶対寫象、また一切智にして、法界に周徧せる本然の寫象にして、虛微靈明なる自然の智慧態なり。解脱は活動にして、絕對意志、即ち法界に周徧せる法身の屬性として活動力なり。

三徳秘藏は不縦不横、不一不異なれども法身を體として寫象と意志とは格別に體あるに非ず。

個體の精神と寫象と意志とは絶對精神の個體現象動力なり。此三徳は一體の三方面にして離るべからず。

十界は十方

法身と象と動力とは一大元理により、不思議にして、十種の心變化の法則あらはる各異方面を見る同一理體の法不可思議にして十種の異方に變現するはこれ又唯心所現の理なり。法耐として十界の依正謂ゆる地獄乃至佛界、是精神に迷悟によりて凡聖。

靈、精神の靈たる虚徹靈明にして、絶對寫象の個體現象として萬物は、互に相寫象す。各々個體法界交渉し、個々の觀念に無邊の刹界を寫象するの靈(交)徹靈通の心象なり。

空。(一)空間の智にして、本體の一理を觀するとに相應する智、空慧と名づくべきものにして、純粹なる空慧の周徧なる智態なり。

假。一切の現象界、十法界の現象も、重々無盡の交徹せる現象も、十界の無量の身心土(宛)然として絶對寫象の自中顯現なり。個人の宇宙觀は其の個人の現象なり。

中。絶對の周徧の空慧の智態と、其の中に顯現せる現象とは、雙照し雙觀すれば空に非ず、假にあらず、空にして假なり。雙照せるを色は寫象の個體現象、中觀と名づく。

識。一切衆生、個々の心象たるは、絶對智慧の個人現象にして、其の絶對は即ち彌陀なり。此の寫象より個々の人機を現象す。

九界の衆生各々の心機に隨つて、種々の寫象を異にせる、一水四見の理の如し。

藏性

宇宙の本體なる如來藏性には、一切萬法の徳の具さに備へて遺すことなし。華嚴に所謂法界緣起、重々無盡の萬法も、又眞言に所謂金胎兩部曼陀羅と云ひ、唯識百法と云ひ、天台の一念三千と曰ひ、一切萬法は悉く此無盡の徳を有せる藏性の内存に出でたるものとなす。

博覽強記多才の頭腦には萬卷の書を藏めて餘ある如き、此記憶より恣に出入するごとく、宇宙一切の現象は悉く藏性の所現なり。

彌陀淨土判釋

最も高等に進化せる宗教の判釋によれば、一の宗教的精神界には、娑婆即淨土にして、精神已に彌陀に歸し彌陀の生命に入る時は、此身を脱せずして觀念的に彌陀の中に安立す。

天然の現象界にして感覺世界の外に未だ最高等なる觀念世界に入らざる限りは、彌陀の淨土の中に存しつゝ、天然意象の皮殼に覆染せられて、自ら高遠なる彼岸に空望するは、宗教意識未だ發達せざりし爲に致す所にして、是我淨土教の宗義の低(一)が故にしかるにあらず。

觀經の去此不遠とは娑婆即淨土の義なり。是精神宗教なればなり。

若し精神にして其意象を超越するにあらざれば、たとへ十萬億のみならず百萬億を超ゆとも、淨域實現すべき理あることなし。

是自中在即ち彌陀の中の現宇宙界なればなり。阿彌は是絕對の實在なればなり。唯自己の天然意志を超て、彌陀の實在に入らずして、十方法界何れの處か彌陀界にあらざる處かあらん、是佛教が具存教なればなり。觀經の淨土の莊嚴依正二報の莊嚴に於て、人の宗教意識の機能彌陀に致一せば、一切の處に於て實現せることを説たまへり。導師は觀經所説の淨土及び彌陀を以て報土と釋せり。然れば知りぬ、自己の心機に致一せば十方世界悉く淨土なることを、是最もも高等なる宗教の判教なり。

感覺世界は是穢土にして淨土に非ず。而れども此感覺世界は絕對なる彌陀の實體の中なることを記すべし。意象に於て淨穢永く隔り、處に於ては内外あることなし。若ししからざれば彌陀は是絕對無限にあらざればなり。觀經、是心作佛、是心是佛、是淨土教は精神宗教にして具存一體教の證なり。

大乘諸法實相論

大乘實相論即ち無相皆空論は萬有の實相

諸佛依二諦、爲衆生說法、一以世俗諦、二第一義諦、若人不能知分別於二諦、則於深佛法、不知眞實義。

凡夫の眼に宇宙萬象森々たる差別的萬類は凡夫の爲には眞實なり是を世諦と名づく然るに差別萬象の眞相實體に悟入したる眼には差別的の當體即ち空不可得にして無差別なり。故に達人の前には差別即空にして空が眞實なり。之を第一義諦と云。要するに宇宙間差別萬象の宛然として羅列するは唯其假幻的の有相のみ。夫れ眞實相は畢竟不可得なりと云にあり。如何か諸法は總て空なりや。中論に因緣所生の法は、衆因緣生法、我説即是空、何以故、衆緣具足和合して物生、是物屬衆因緣故、無自性、自性なきが故に空、空亦空、是法無性故、不可得言有、亦無空故、不得言無、若法有性相、

則不待衆緣而有、若不待衆緣則無法、是故無有不空法。

諸法は皆無因より生ぜず、一因より生ずるものなし。衆多の因緣和合して生ず。現に宇宙は各自の顛倒妄業染の因緣より現はれ、佛陀菩薩の淨界は其修せし功德善行より生ず、因緣に淨と染との異あれ、皆衆緣和合の影（ ）にあらざるなし。

諸法は自性なし。自性なければ空と名づく、因緣和合して方に生ぜし處の十界身土なれば無自性なり空なり。空とは客觀的に緣（ ）、無性をもて説明すとも究竟言語道斷、心行所滅、凡夫分別思慮を離れたる處を空とす。

八不論に「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不去、能説是因緣、善滅諸戲論、我稽首禮佛諸説中第一。」

生滅一異等は諸法の假相のみ。衆生は之を執して實となす。畢竟其迷見なり。此八事は衆生迷見を束ねたるものにして因緣和合して相の現はるは生なり。力盡きて相の謝するは滅なり。人之を見て實生滅と計ふ、是を生滅の見と名づく。諸法は本體よりは同一にて現相よりは別異なりと思ふは一異の見と云ふ。人死すれば心身共に斷滅に歸し或は心は常住不變なりと思ふも、斷常の見といふ。又人或一道に向て去るを去來の見と云ふ。此八事の假相に執着して之を眞實なりと認むる所の迷見、即ち主觀的誤謬ならざるはなし。此八（ ）より一切枝末の見粉起して許多の迷見となる。故に八の上に不の字を冠らしめて一切之を消遣するを八不と云。一切の主觀を否定し、分別を消遣して、言語道斷心行所滅の處を中道實相とす。

諸法を壞せずして眞際を説は世諦即第一義諦にして眞空なり。眞際を動せずして諸法を立るは第一義諦即世諦にして妙有なり。

萬有の緣起

宇宙の開展萬有の生起を談する亦業感緣起論なり。即ち世界も人身も皆顛倒妄業より生ずと云、業も煩惱も其體は空なりと。

智論に「凡夫人、不入聖法、不知諸法、無性相顛倒愚痴故起種種業因緣、是諸衆生

隨業得身、若地獄乃至三惡四趣等。」

若諸法性無所有、非佛所作、乃至非菩薩所作、云何分別有諸法、是地獄是畜生是人
是天、乃至、用是業因緣故。

中論「眼見生滅者、則是愚痴顛倒故見、諸法性空無決定如幻如夢、但凡夫衆生顛倒
因緣、得此眼、今世憶想分別因緣故、言眼見生滅、第一義中實無生滅」

世諦の上に業因緣あり。眞諦より見れば其業體即空なり。凡夫は愚痴の故に眞諦を
知らず。唯世諦に滯りて業因緣に轉せられて生死を感ず。能く眞諦に達する時は、幻
の如く夢の如く、是を生死を出づとも涅槃を得るとも云ふ。

宇宙萬有は業力所感、又三界無所有、皆心所作、一切從心生、六識を心と云。憶想
分別を指、即ち心に由て業を造り業に由て宇宙を感ずとの意なり。

涅槃及佛身論

涅槃の涅槃とは滅度とす。一切の煩惱を滅盡して生死海を度脱するの義なり。中論
に「受諸因緣故、輪轉生死海、不受諸因緣、是名爲涅槃。」

世間虛妄相に執着する煩惱を滅盡して、眞實相の全顯するを涅槃、即ち本來の實相
に復したるを涅槃と云。

中論に「涅槃實際及與世間際、如是二際、有無毫釐分別。」

佛身消極

邪見深厚者、則說、說無如來、如來寂滅相、分別有亦非

又佛二種身

一法性身、二隨世間身。又二種、一眞身、二化身。

法身は佛の本體にして常住不變、一切處に徧十方界に滿ち萬德圓滿、衆生具足し、
說法し衆生を利益す。

智論に佛眞身者、徧滿虛空、光明遍照十方、說法聲亦徧十方無量恒沙等世界滿、中
大衆皆共聽法、說法不息一時之頃、各隨所聞而得解脫。

肉身は衆生を度せんが爲の方便身、釋尊の如き。

復次釋迦牟尼佛、王宮受身現受人身、有寒熱飢渴睡眠、受諸謗誅老病死等、內心智
慧神德、眞佛正覺無有異也、(一)滿衆生所願悉皆能滿。

こぼるゝ光(其二)

大谷仙界

山に這入らねばならぬ様な佛敎ではつまらぬそんな佛法ではない。佛法は心にある
垢を落せと云つたからとて皮膚まですりおとすではない。さまたげとならぬ入用の
ものまで捨てる事ではない慾も垢慾をすつるなり。

○

上人越路巡回に痲病の時、病氣のつらさと之に耐ふるの力とを試したきものと兼て
思ひしに幸に試みる事を得たり。大分熱が出て來た體が重くなつて來た、愉快だ、ま
るで、ジオネスが大熱病の時に尙ほ奮闘して前を通行するものに對し大角力を見んか
曰く病氣と努力との力くらべの角力。上人は熱四十度位を耐へて平然として法悦の中
に仕事を營む。何十年多く如斯くして精進せられた。

大正三年五月廿八日夜十回下痢朝四回。然るに大宮彌五平氏の願に依り榮源寺に於

て放生會に出動、直に引き續き説教一席、實に精神の健全なる偉力驚くに堪へたり。

○

三河國碧海郡巡回の時、水谷と云ふ所に感心な後妻あり。彼曰く自分は不幸にして子供もない之も業障故若し今度縁づく事もあらば子供の澤山ある處へ縁づいて出来るだけの世話をして業障の懺悔をせんと。然るに今度縁づいた時に先妻の子供を愛育するので舅。姑等も皆なつく。然るに夫は他に女を持つて此の後妻を出さんとする。而して其の女と云ふが下女であつて夫は其女と共に食を同ふし妻をして給仕させる。然るに之も業障消滅の爲めと堪ゆ。此家の長女が隣村に在て尼となれり。聖善尼と云ふが、後妻なる母に同情し、何卒出ずに御辛抱下さい。又た村の有志も集りて曰く、村の手下になるべき人をあんなに虐待されては村の面目にも關するとして、下女の實家（隣村）に迫り引取らしむ。又た聖善尼は毎夜父の心の改まる様にと五百禮宛禮拜す。聖善尼上人の教誡に參せんと仁四郎町へ通りかゝると、偶然父と會す。幸なりと父を同行せんとすれば父は逃げ去る。後仁四郎町の藥師堂に上人説教中に來たる。而して信仰に入り、それより水崎の説教へも參詣し途に家庭も一變す。

○

子供の時は小さい家の内に居るのを厭ふて自然の野を慕ふものが、大きくなると外を厭ふて兎角内に引き籠りたがる。廣い家を狭める、つまらん事だ。暗い狭い家より明るい廣い外があるでないか。それが其儘御親の家だ。

○

燃ゆる性なきものには他より如何に誘惑せんとするも誘惑せらるゝ事あらんや。人よ誘惑するものを責めんよりは、先づ内心の煩惱を降伏せよ。此賊をしぼるのが定、此の賊の首を斬るのが智慧。

○

家を建てゝも實際の必要の部分は空間である。此の空間は大工が造るでもなく左官

が造るでもない。宇宙本來の空である。此の空は火にも焼けず。大工左官の造つたのは同一空間には内外の隔を作つたまでである。此の造りたる隔の家は火にも焼ける。造つたもの故滅する事もある。眞實の家、住むべき家は木竹にあらずして空間。其空間は造られもせず本來の空。心靈の戸を開けば宇宙一體觀。我は宇宙全體の我となる。此に眞實の我現はる。

○

私は或時上人にこんな事を言つて見た事がある。上人を死刑よりも苦める法として日々三度々々山海の珍珠に腹鼓を打つて仕事は何もなさるな、書も見るな念佛もし給ふな、唯美味を食しては遊び遊びでは寝ねよ、これなら上人困られるでせうと。上人云はくそれは困るよ、あの雨降には子供も閉口してくたびれて寝る様なものだ。

○

大正三年四月三十日上州高崎市長内田信也氏宅にて大法寺老婆(八十一歳)上人に謁して曰く此世がウルサクてならぬ如何すればよろしきやと。上人訓して曰く、此世をうるさく思ひ出したるも慈悲、こうして親様は尙ほ結構な御國を慕はしめんとの御思召ならん。歸りの支度をさせて下さると喜ぶがよい。また老婆曰く、仕事がうるさくてならぬ面倒でかなはぬ洗濯の手傳などうるさいじつとして念佛が申したい。上人曰く、念佛しながら洗濯する。洗濯が珠數なり木魚ぢや。御名で心を洗つて下さるから自分も洗はれるだけ洗つて此世を清めねばならぬ。上人又曰く、體はじつとしてゐても體の内には常に御親は働いて下さる、胃袋も休まず、血管も休まず、皆これ如來の御活きが内に働いて生かして下さるのだから、生かして貰ふてゐる間は此の體を殺し置きにしてはすまぬ。

○

上人の教化に浴せられた方で中村妙觀と云ふ奇特な尼さんがある。二兒を亡くしてからあきもあかれもせぬ夫婦の中に此の強き因縁の爲め自から出家す。大正三年の頃

今郷里に堂を建つて住す。夫も敬す、地の人皆敬慕す。越後長岡よりは八里汽車をそれより又七八里奥に入る。護法の念深し、三十歳にて出家す。長岡の法藏寺淺井師の門前に金佛あり。子供等白墨等にて汚す。淺井師奥さんに命じて掃除せしむ。奥さんはバケツをさげて行く。……心に思ふ様、時には佛さまも子供等を此處からつき落しなりとなされたら子供等もいたづらをやめるであらうにと、……時に門前に來れる妙觀尼何事です。奥さん云はくこれくで今和尚様に申つかつて……妙觀さんはさつそくとどうぞ私に手傳はしてくださいと、同尼は歡びの涙に稱名しながら「あたり前なら私の様なものはあなたの御顔に手をふれる事は出来ませぬが、子供がいたづらしたので却つて此の私にかうして佛縁を結ばして下さる、ア、有難うござります。商無阿彌陀佛く。ほんに親様は御顔を汚してまで是非もわからぬ子供等に因縁を結ばせてください、而して此の私にもかうしてはからず因縁をお與へ下さる。思へばもつたない。お顔を汚してまで……」

奥様も之を聞いてほんに妙觀さんの様に心得て居れば此の世に不平はないだらう。

○

岐阜の絹織會社に説教を創めて開く様になつた。因縁は家庭不和の一家があつて、妻は娘一人をつれて再三投身を企て、或時奈加良川へと行く途中、寺參りの歸りの人々に逢ふ。彼思ふに死するにしても暗、願くば法を聞いて死なんと。上人説法の寺に來たり(明治三十二年)開法更生す。依て今後は夫に心好く暮さん。思へばこれまでの夫の虐待も寧ろ善知識よ。然るに夫もさらばとて家と財産とを妻子に與へて、自分が出て妾と同棲す。後娘長じて絹織工場に出す。時に主人に對して、月に半日宛二回説教聞きの爲めに暇をくれよと。主人曰く馬鹿な事よ、説教聞くより仕事したがよい。賃金が取れる。尙ほ洗濯日とて月に二回は休ませる。唯汝の都合よき日に勝手に休ませる事は出来ぬと。時に母曰く、然らば仕事が出来れば預かる子女の心はかまはぬのですか。品と人の心と何れが尊き……私共は佛法に依て今日の生命を存す。佛法

を離れる事は出来ぬと。それから身上話をしたので、主人公も感心して、然らば一層皆に毎月聞かせる事にしようと思ふ。然し私如き者の話が本となつたとあつては、社の名にもか、はるならん。依て病院の院長さんから定めて話を貰ひませうとて、遂に話が成立して毎月二回布教せらる。工女數百今日まで(大正三年)十五年幾多の人々に佛法を聞かし心を養ふた。其功德は大したものである。之も唯一度の更生より來たる大活力の然らしむる處である。

○

深川在出村の鈴木氏嘗ては弘法を信す。願くば生きた弘法様に會ひたいと念す。後上人に會ひて生弘法として喜ぶ。されど凡夫の念佛往生を疑ふ。再三説を聞き遂に念佛信者となる。或時屋敷の庭先にある畑に在りし時、妻が彌陀經の轉讀を爲して八叻徳池と……讀むのがさながらコ、にあるぞ見ゆるぞと云ふ様である。下駄ながら飛上り、何處に在ると見れば、現前に青蓮、次で翌日は黄色の蓮華が見ゆ。翌日は赤色五色の蓮の色中一色見えなかつたが、遂に彼は發得す。

○

上人五香の寺の隣に火災ありし時風の都合で善光寺は火焰の下になる。上人此の時便所へ入つて居られた所へ火事々の聲。然し上人はおもむろに衣をつけてから本堂に至り、本尊を出さんとす。下男曰くあなたそんな事をして居てはいけぬ梵鐘を打てくれ。梵鐘を打てると今度は早く本尊を出さぬといかぬと云ふ。上人曰くさう兩方一時に出来るものか、焼けるものは焼けても大事ない。時に俄に風は變つて寺は無事本尊も無難。

○

上人爰は自分で大概はすえられる。後頭の所だけ手傳つてすえて上げる。足の如きは左右一緒に數ヶ所に火をつける。煙ののぼり通してある。それに上人は平氣なものだ。或時爰をすえつ、曰く、爰をすえると身體の爲めに善いか悪いか果してきくか否

かは知らぬが、兎に角すえるとい、氣持だ。だからすえろ。念佛も浄土へ行けるのか地獄へ往くのか實際の所は知らぬが、然し兎に角一心不亂に念佛すればい、氣持になれるから止められぬ。

○ 或爺さん曰く、上人は拜んで置けばよい。聞くべきものではない。上人は生きたお佛壇であると。

○ 上人曰く十二光に佛と云ふ字の附いてるのは光が光だけではつまらぬ。佛とは光を得たる人だ。覺者は即光を得た者である。光が體しられたので光の徳はあるのである。十二の光を攝しおさめて徳を顯はす事が出来る。今其の徳を顯はすものなるが故に佛の字を附す。

○ 大正三年二月廿一日大垣求淨庵を發し途中岐阜本誓寺に立寄り同日午後七時七分の上り列車に依て上京、翌朝大船に下車、途中鎌倉湯地定鑑氏方へ二泊、廿四日午後一時淺草誓願寺へ到着。此際岐阜より鎌倉までの車中一夜に百餘首の歌を詠じ給ふ。一夜に三百首位は何もめづらしき事ではないと語られた。

○ 病者等の現世祈禱の如きは排斥すべきよりも寧ろ同情すべきであると。

○ 或時岐阜縣下の或寺院が耶蘇反拒の爲めにとて上人を招待す、三日間上人一言も耶蘇教を駁する事なし。寺僧曰く、今回貴僧を招待したのは耶蘇教を打つて貰はん爲めである、然るに一言彼を駁する事なきは甚だ其意を得ざる事なりと。時に上人答へて曰く、私は貴僧に招待されて来たのでなく、耶蘇教に招待せられて来たのである。其の耶蘇教の悪口はいへぬ。然し耶蘇教の盛になる事を欲するならば悪口をするがよい

けれども、耶蘇教に招待せられて來はしたものの、彼の盛になるを望むのでないから彼を駁し悪口はせぬのである。

○ 上人の僧階や住職名義は茅根學順師及野澤俊阿師等の計らひである。其の次第物語はこうである。或時真言の管長高須大亮師が、右兩人に淨土宗は美事文明式に違つてゐるが、惜い事には人物を逸して野に放つて居る。辨榮とてすばらしきすばぬけた求道青年あるとて話したので、兩人は早速と辨師を訪問しおもへらく、彼の大道長安が觀音主義の信仰を鼓吹して禪を飛び出たやうに辨師を宗外に逸せん事を恐れて、試補に叙せんとした。先づ履歷書を出さしめんとして用紙を持ち來たる。然るに上人は、

我はこれ佛弟子なれば許せかし

世渡る試補を厭ふ身なれば

とてさらにそれらの望みなきま、履歷書も提出せざりけるに、其後上人頭痛を痛みてありける時、病床に師等又訪問し、印鑑を借りて上人が嘗つて寺を建立せる等の履歷に依て試補を送り且つ住職に任ず。後又小石川本校の件につき上人を使はんとしける時、上人曰く働かばりに其禮としては教試補と住職名義を捨てる事を許し給へと。

○ 上人出家して東漸寺へ入られた當初は下男役まで勤められ、廣い境内の掃除から本堂庫裡の掃除さては飯たき風呂わかし、眞に其頃は非常な働きで而かも夜間おそくなりて勉強。さればほんとに眠られる時間は僅か二時間位であつたと。だがぐつすりねむるから、それでも若い時充分であつた。勿論眠つて夢など見るやうなひまはないと云つてゐられた。

○ 今九州五島におられる方で、以前北海道に住職せられてゐた頃の話だとて、其方から承つたのに、上人が北海道に傳道に來られ、其方の寺へおいでの時は、裸體で（勿

論腰衣はつけてゐられたが、直に袈裟を着けてゐられた。そこで其わけを尋ねると、やかつて印度へ佛蹟參拜に行くつもりだから、印度行儀の練習をしてる所ですと。

○ 上人が明治四十五年夏、筑後善導寺滞在殆ど一百日にもなん／＼とするも、更に上人の説法に耳傾くる者もない。上人はまだ九州に因縁熟せざるか、然らば一と先づ東國へ立去らんとおぼしめしける折柄、ふと久留米の市中の眞言寺にある高山彦九郎の墓に詣でられ、地下彦九郎に語り給ふやう、君が勤王の志を抱いて各地に奔走せし際多くは君の赤心の叫びにも耳をかざりし事の如何に残念なりしならん。余今道の宣傳にとて九州に來たりしも、只一人の能く傾聴する者なし、願くば地下の彦九郎殿せめて君なりと余の語るところを聞きて給へよとて、懇懇に回向して地下の勇士と語られたといふ事である。

○ 上人が初めて明治四十五年の春九州へ下向せられた時は、隨行もなく、只一人で信玄袋、繪のわく、頭陀式の頸かけの荷などを振わけにかつき、而かも兩手にも提げられ、何處の乞食坊主やらと云ふ有様であつた。服装には古代希臘などの哲學者などの用ゐたやうな儀仗を用ゐられたので見る人々が愈々變な坊さんだと妙な顔して見るしまつであつた。

○ 上人の御母堂の逝去の當時は、上人は筑前遠賀郡穴生の弘善寺滞在中であつたと云ふ。其時御母堂の死故定めしお歸りの事ならんと御伺すれば、母の菩提の爲めには却つて斯く遠にあつても道の爲めにと身を献げて盡す事が何よりの追孝とこそ心得れ、尙ほ此度九州へ來る前に母にはいつわかれとなるかも知れぬからと御法の事どもよく／＼お話し申したるに、自分が死ぬ様な事があつても決してわざ／＼歸る事なく、それより大切な如來様へのお仕へこそ專要とせられたしとの母の言葉であつたとの事であつた。

ある。

○ 上人大正二年の夏頃迄は髪を剃るに一々人手を煩はされたので、床屋のない邊靡の地に行かれた時など、髪を伸ばるのに随分お困なされたやうである。然るに或人が安全かみそりをお進呈申上げた。非常に喜ばれそれから専ら安全剃刀を時々用ひられ頭ひげ等すべて自分で入浴の際をられた。其後普通の剃刀を以て頭もあごも全部剃られる事になつた。これで大變便利になつたとお喜びであつた。

○ 九州中は何處を御巡回の際も精進料理であつた。然るに東京へ歸途鎌倉の湯地定鑑將軍の處へ立寄られた際は、奥様の御手料理で西洋料理や魚肉などなか／＼の御馳走隨行者は上人が如何なさるか一寸好奇的に上人の態度を見てみると、上人は平氣で御馳走様とて御召あがりになる。そして少しづつ御食しなされて大概は隨行に下さる隨行は大早の雲霓を望むが如く大いにやつた。

やがて東京へついてから、上人に肉食はお好きですかおいくござりますかと聞くと、上人は好きではないが供養なれば魚でも何でも難有く頂きます、と。然しどちらかと云へば食はぬ方がよい。それは私は魚類を食べると腹が悪い爲め直に下痢をするから可成精進物がよいと。ついでに書いておく、上人は食事は安價で滋養で簡単に食事の出來る事がよいと出張せられた。牛乳はガブ／＼飲まずに食事の時飯にかけておめしなされた。リングを食べられる時は皮をむかすに能くふいて食べるがよいと話された。又温い御飯よりちよつと冷へた御飯の方が消化がよいなど色々そんな事にも深い注意をうけたまはつた。

○ 早朝出發して一番列車に乗ると云ふやうな場合には、大概朝食はオニギリにして貰つて、車中でたべるやうにせられた。隨行した者の如きは車中でお握飯を手にかへ

てパクリ〜とやるのは至極つらいのであるが、上人は平氣否な寧ろ此れがたのしみかの如くにも見うけられる。

一八

○ 汽車の切符を買ふには先きまで通して買ふ方が割がよいとか、物を送るには如何なる方法の方が經濟になるとか、繪絹を反で買入れ年中澤山書かれても、それに依つて概略どれ位の布施金がありどれくらひ傳道其他に融通が出来るかは、上人にはちやんと御承知であつて、計算も何にもわからぬ様なぼんやりではない。

或時筑前の田舎道を上人のお伴して行く時左右の田地を見られて、よく出来てますね、この邊では一反にどれ位の收穫でありますかと尋ねられ、隨行は返事に困つた。すると上人は下總あたりでは一反にどれ位取れると云ふ事が、農事實際についてお話があつたかおぼへてゐない。

○ 上人はなか〜記憶がよいが、何か特別な修養か方法でもあるのですかとお尋ねすると、若い時に(斯う書くのであらうかあて書きして置くが)具文持(グモンジ)の法と云ふを修行したと云はれた。やはり一種の記憶ならんか。

○ 大正九年十二月上人柏崎に御遷化の二三日前の事、御枕邊に伺ひ申すと、遠方よく来てくれたとの挨拶の御言葉と共に、私の弟子の名を呼んで磯邊は〜と云はれる。私は思はず涙がこぼれた。私の顔を御覧になると、私の弟子の事まで氣にかけさせられて、其安否をお尋ね下さる事の如何に廣大の御慈悲かと感じた。それと同時に多くの病人などは臨終にもなれば、目前の人物さへわかちかぬるに私の顔を御覧になり、弟子の名さへも御記憶中よりハッキリと御仰せられる事は、如何に御精神の確かなるかを拜察する事が出来る。

一九

○ 筑前の粕屋の顯孝寺で御教化の折柄であつた。六疊の御室内を只だアチラに行きコチラに行き室を逍遙せられるのを見て、侍者曰く、上人様そんな事で運動になりますかと申上ぐれば、上人はニコリせられて、これでも大宇宙を逍遙散歩するので運動になりますよ。

二〇

○ 今後の宗教は教育と聯絡しなくてはならぬと常に仰せられ、學校教員などに講演せられるの殊にお喜びなされた。そして追々吾人の理想が實現せられるやうになつて来たと云はれた。

○ 私は大正二年から上人を隨行をしたのですが、出發迄は布教と修養を兼て、上人のお伴をしたので、初から上人格の主義人格などに惚れ込んで隨行したのでない。場合に依ると探偵式の隨行であつた。四五十日隨行したが。説教などは段々地方的に下手になる。又上人の主義と云ふのが何だか氣にくわずに、異安心ざらひと云ふ様な氣持もするから、遂に上人の隨行を中止しようとして、其相談を一二の人と打合せして決心して歸ると、上人は私に法然上人の御道詠について、其意味を如何に心得るか尋ねられる。試に答へる。それにつけ上人の説明を承はると自分の心得や解説がなつてない。深く上人が元祖の道詠について味ひ給へる所を聞いて、初めて元祖の眞意をおぼろげに窺ふ事が出来る心地して、それからこれは大變此の大師を離れてかゝる尊き説法を聞く事は出来まじとて、遂に暇乞を見合せ、それより約一年二ヶ月の長き間引續き各所に御隨行してお育を受けた。思ふに私の去らんとする決心の時、上人は之を觀破して御説法下されて慈悲の御手に攝めて下されたものと思ふ。

○ 淨土宗と云ふ立場から上人を眺める時、どうしても異安心の様であるし、また上人の様子がどうも新淨土宗の建設にあるもの、様だから、私は此の上人を生かし置く事

二一

は宗門を攪亂する恐あり、よろしく大勢力とならぬうちに上人を刺殺すこそ一宗の爲めだ、自分は寧ろ犠牲となつて上人を刺さんとまで思ひはまつて、奮然上人に宗義の問題で迫つた。すると上人は毅然として辨榮の苦心は如何にして法然祖師の眞精神を現代に復興せんかとの一事であると。此の時の上人の態度及其涙ぐましく御言葉に、私の心はやはらひで活ける現代の法然上人は此の上人よと感ずるに至つた。

○

大正六年李仁鐸君が朝鮮より隨行して來た。鹿兒島不斷光院や若松善念寺等に私と共に隨行して至る所李君はなかく歓迎せられた。九州を去つてこれから東京へと云ふ時下の關より車中上人と同じ腰かけにかけてゐた商人體のでつぶりした五十四五歳の男が、いつの間にか上人と心安くなつて、色々話をしてゐる聞けば、若松の人らしいが其の話がふき出さずにはゐられぬ。若松の善念寺に偉い坊さんが來たさうだ、處がその坊さんの話は何か何だかぐすくすわからぬさうだ。だが朝鮮人の話はなかくよくわかつて皆感心してゐました。あなたがたはどちらの方でどちらへおこしですかと云つてゐる。上人はにこ／＼してハアそうですか／＼と聞いてゐられる。私は其人が三等車の難有さに上人と同席してゐながら、左様の尊き聖とも知らずにゐるのが氣の毒にも思はれたから、つか／＼と其の方の方へ近よると、上人は目で云ふな／＼と云はぬばかりにせられたけれど、一層言つてやるのも功德だらうと思つて、其の善念寺にお出になつた上人と云ふは此の方ですよ。乗合したもよく／＼の御因縁、若松で聞かずに車中聞かして貰ふも不思議ですな、よくお聞きなさいよと云ふと。其の男恐縮の體でもやんと沈黙してしまつた。ああやはり云はねばよかつたと思つたが仕方がない。後に上人仰せられるに、あのまゝにして置けば話も出來たのに、いらぬ事を云ふたからつい先方が沈黙してしまつたよ。

○

人車に乗るよりも徒歩を喜ばれた。座つてばかりゐるから徒歩で行くと特別樂みが

多い。時には汗も出して脂肪もしばらぬといかぬとて、如何にも元氣に御歩みになるなかく／＼早い。

○

時によると、午前四時頃から起き自己アンマをしてゐられる事がある。少しもみましようと言うと、イ、エよろしいとてなかく／＼もましては下されなかつた。或時は手をくみ合して靈動運動と云ふ様な事をしてゐられた。

○

人物を育てる事や人物を濟ふ事には惜しげなく財物を惠まれた。光明學園の爲め身心を勞された事は云ふまでもなく、幾多の學生や立派な人物が澤山上人にすくはれてゐる。

○

大正九年即上人御命終の年だが、其夏伊萬里定光寺で未だ嘗てない十五分ばかりの午睡をとられた。腎臟は數年前からであつたが、其爲め休養せられると云ふ様な事はなかつた。然るに九年の夏は屢食後十四五分間横になつて午睡をされ、初めて晝寢をして見たが十五分位するとよい氣持になると、其後ちい／＼晝食後おやすみなされた。思ふに上人の御疲勞のいかに甚だしかりしかを察する事が出来る。

○

大正九年夏筑後法林寺にて御講演の時、仙界に仰せられるには、若し今自分が死せば誰を中心とするかとの意外の御尋ねを受けた。私はその時思の儘を申上げた、上人曰く暫く中心を誰ときめるな、そして當分は主だちたる人々で輪番制にでもして指導や世話をする事にせよとの事であつた。思へば之が御遺言であつた。早や此の時上人には死期の近づきし事の明に御承知出來てゐたものであらう。これ程の御言葉を聞きながら、尙ほ驚かすにゐた事が愧かしいやら残念なやらである。

○

上人が初めて行かれた寺では能く其寺の開山はどなたですかと問はれて、地方教化の因縁の開けた事や歴史上の御参考とせられた。それから朝本堂で念佛して下りがけに如來前に行き尊像をお見上げなされて古い佛様だのよい作品だのいつ頃の作だらうなどと云はれる事が度々である。それで試に上人に問ふた、上人様あなたは念佛中には前にかたむき眠つてゐる様な格好で念佛して、下りがけになり尊像を見上げながらも無禮千萬にも古いだのどうだのとけしからぬ事と思ふ。一體念佛中には一心に佛様の御顔を見上げ申してこそ念佛すべきではありませんかと云へば、上人笑ませられ、左様私をもつと、大きな御本尊をお見上げ申して念佛してゐますと。

明治四十一年に冒險雑誌の臨時増刊號に神仙譚と云ふが出た。その中に掌燈苦行の仙僧山崎辨榮師と云ふ記事がある。其記事について上人にたづねた。上人様何で掌燈などと云ふエライ事をなさいました。ハアまあ若い時随分無茶をしたものさ。而しそれもやはり自分の意志試練する爲であつたと。それが雑誌には東漸の竹やぶとありますがと聞けば、いやそれは醫王寺の藥師堂でした。熱いでしよう。そりや少しは熱いよ。火ぶくれが出来てそれがはちけてその破れ場に油がにへ込むのがちよつときつよい。而しそれも暫くするとこらへよくなり、平氣でやれる、後は至極涼しいと。上人様雑誌にも一ヶ月も筑波山に斷食された様に出てゐますがと云へば、何に麥を少々持つて行つた。薪物は山だから自山、それでたいてたべた。又其雑誌に上人若い頃盾目清秀容貌端麗なりしを以て、米粒名號を下さいとやら書を書いてくれよ佛畫を願ふとやら、澤山の人々の出入の中に未亡人などの思ひを寄するものがあるが、上人は何等それらに依て動する事なく、如何なる場合にも如何なる人にも同一の態度で說法指導された。或時一婦人が守本尊を願ひます、此の状袋の中に年やなぞ書いてありますからと、置いて行つた後で開き見れば艶書である、二三日すると先日御願の返事を下されとあつた。上人はそこで返事認められた、その文に、はああなたが私を愛して下さる事

は嬉しい、然し私は世界の淨氣者ですよ、あなた一人を愛すると云ふわけには参りませぬ、私は世界中の女を愛する者でありますから、と云ふ意味の手紙を遣はされた。多くこの筆法で上人には惡魔もよりつくすきがないと其の雑誌に記されてゐた。

大正六七年の頃であつた筑前の長安寺檀家の或内に御教化を願つた際、本宅はあまり取り散してゐるからとて、其内の隱居さんの物置の二階六疊ばかりの窮屈な處へ、普通の梯子をかけて御昇りなされて御說法して下された。こんな法筵はおそらく類のないことであらう。かゝる場合には上人に於ては大夏高樓の說法と何等選ぶ所はない

筑前粕屋西林寺教化を了へ御出發の間際、寺の母堂が挨拶に出られると、上人は取りかたづけられた道具を又取り出して、お、お母さんあなた今御佛様の御姿を書いて上げましよう、胸から上だけの如來様を一寸の間に書いて與へられ、云はれるにはアナタが一心に念佛すれば、佛様が今に御足から蓮臺までも拜まして下さるからさうならして頂く様に一心に念佛なさいと。

福岡縣直方町隨專寺住職宮島氏は、随分押し強い方で、上人に色々の書など書いて貰つて、愈々上人出發と云ふ間も、はや道具等一切かたづけ、汽車の時間が間にあふかしらと思ふ位の急場に、更に畫仙の全紙を出して雲中の彌陀をと押強く願ひする。隨行は顔をしかめる。それを上人は又道具を出して墨繪で胸から上の如來様を僅か五六分間で書いて與へられた。御手などは書いてながなが非常に元氣な如來様が御出來なされた。

上人初期の傳道には彌陀經の宣傳であつた。後歎徳章になつた。或時上人曰く、彌陀經を弘めた當時から、歎徳章をやつてゐたら、今頃はもつと傳道の成績を擧げる事が

出来たであらうにと申された事がある。

○ 上人オルガンを自ら弾かれて歌を考へられ、聲を出すには三本の指を立にして口に入れる位に口を大きく開き、そして喉を丸くして聲を出すとか云つて、なか／＼斯道の方面にもなか／＼研究せられてゐた。その割に上人の歌はれるのは音楽的でもなかつた様であつた。

○ 關東方面で盛に米粒名號等を施された頃は、上人の米粒を飲んで安産したとか生れた兒が手に握つて生れたとか、色々の奇蹟があり、上人に十念授けて頂けば病氣がなほるとか、郷里方面では上人が來られると知ると、汽車の道筋などを各驛に多數の者が出て來て十念を受けると云ふ有様であつた。

○ 上人のお弟子の中に上人を傷げる様な者があつた。或人が上人に申す様天眼通の底級でさへ誰がどんな事をしてゐるとか思つてゐるとか知るものを、見佛を悟り法眼開ける上人として弟子其他の不都合などはやく之を知つて適當の方法を取られたらよろしからんにと云へば、上人は天眼等の方面に始終心を用ゐておればそんな事も出来るが、そんな事に自分は餘り心を向けてないから云々。

ペンネイ シヨウニン ト コイヌ

ナカイ ベンジョウ

タイシヨウ クネン ノ ナツ ワタクシドモ ワ ベンネイ シヨウニン ノ
 オトモ ラ シテ オダリヲヨコハマ ラ ヘテ タイマサン ニ イタリ、ソコデ
 ハツカ パカリ オシヨウニン ノ オソバ ニ オイテイタダイト コトガアル。
 ベンセイ ペンシン ベンドウト イウ サンニン ノ オデシタチ ガ マイニ
 チ アサ ワ ハヤク ヨリ ヨル オソク マデ ホトケ ニ ツカエシニ
 ツカエテ ウルワシイ シュギヨウ ノ セイカツ ラ シテオラレル ノヲ ミタ
 ワタクシ ヲ ムカシ セツン ニ ツカエタ ブツデシタチ ノ コト ガ オモ
 イヤラレタ。
 ソノウチ イタヅラ サカリノ ベンドウ クン ガ ニサンニチ ノ アイダ
 スガタ ラ ミセナカツタ、イツビキノ コイス ラ ツレテ テラ エ カエツテ
 キタ ベンドウ クン ワ マイニチ ソノ コイス ト ナカヨク アンデイト。
 オウアメ ガ マイニチ フリツヅキ アノ ヒロイ ニワ ガ スマノ ヨウ
 ニ ミヅ ガ アフレ、オウツブノ アメ ガ メサキノ モリ ラ カクス クラ
 イ シゲク フリシキツタ アル ユウカタ、イツモノ ヨウニ オウラエブル ラ
 カコンデ ユウハン ラ イタダイトイト、シヨクジ ラ オエテ マダ セキ ラ
 タタス トキ、カノ コイス ガ ズブヌレニ ナツテ ニワ カラエンガワ ニ
 トピアガリ ブルブル ト ミブルイ ラ スル ヤ イナヤ ワタクシドモ ノ
 マエ ニ キユウジ ラ シテイト ベンドウ クン ラ メガケテ アユミヨツタ
 イヌ ガ エンサキ ニ アガツタ ノヲ ミタ ワタクシ ワ スグ ベンドウ
 クン ニ イヌ ラ オワシメヨウ ト オモツタ ガ シヨウニン ノ テマエ
 ジツト シノンデイト。

イマヤ チクシヨウ ガ ドロアシ デ ザシキヲ ケガシ ゴゼンヲ ケガ
 スノヲ ミテ カンニン プタロノヲ ガ キレ イマニモ ミヅカラホ
 ウキヲ ウチフリ イヌヲ オイチランウ トシタ ソノトキ シヨニンワ
 イト シタシゲニ オテヲ サシノバシ オコエモ ヤワラカニ コイコイコ
 イコイ、ト コイヌヲ ヨバレタ。

ワタシノ ハラダチワ タチマチ キエテ ヨロコビノ ナミダ ガ スサメ
 ル ココロヲ ウルオシ、イマニ オモイヤリノ ハナノ ツボミヲヤシナ
 ツテ イル。

タイシヨウ クネンノ ナツノ タイマサン ニワ ハイガ タクサン イタ
 ワタクシワ テラニ ック ト スグ ハイセイバツヲ ハジメタ、シユウ
 ロノハテ ハイタタキヲ ックリ、ソレヲ リヨウテ ニモツテ ヘヤ
 ペヤヲ メグリ ハイヲ ウチコロシタ。

イマ オシヨウニン サマ ガ ドロアシ デ ゴゼンヲ ケガス イヌノ
 プサホウヲ ユルサレタノハ マサシク ワガ セツシヨウヲ イトウヒ
 ノキタレカシト マタレル スガタ カト ウケトラレテ ソノノチ ワタク
 シワ テラデノ ハイセイバツヲ ヤメテ シマツタ。

一二、四、ペンネイ シヨウニン ゴゼンゲノヒ シルス

昭和二年十二月廿八日印刷
 同 三十日發行
 誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
 年拾貳冊 貳圓(郵稅共)
 編輯兼 山崎 辨 成
 發行人
 東京市小石川區茗荷谷町九八
 印刷人 小林七太郎
 電話小石川一四九五
 發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四
 ミオヤのひかり社
 振替東京六六八五一番